今日はバレンタイン。
少し緊張しつつ、グランはナルメアの部屋の扉をノックする。

「はーい。どうぞ。」

扉の中から、ナルメアの明るい声が響く。

「お、お邪魔します。」

扉を開く。
そこには、エプロン姿のナルメアがいた。
その姿に、思わずごくりと生唾をのんでしまう。
声を弾ませながら、瞳を爛々と輝かせる様子や、
チョコレートムースや、ラズベリーピューレを顔につけた姿。
低めな身長もあいまって、
それだけを見れば子どものようで微笑ましいくらいだ。
しかし、子どものよう、では済ませられないのが、
ナルメアの容姿だった。
童顔だが、整った愛らしい表情、
薄桃色の綺麗な髪を長く伸ばし、紫色のリボンで髪を結っている。
一言で言うなら、美少女だ。
しかし、生唾ごっくんの最たる理由は、その豊かなプロポーションだった。
子どものような背丈で、腰回りやお尻もそれほど大きくないにもかかわらず、
豊満なその胸は大人顔負けの大きさ。
いわゆるロリ巨乳な体型は、頭から生える角とヒューマンよりおおきな耳と並んで、
ドラフ女性の特徴とも言える。
そのなめらかで、まっしろな柔肌には、心を揺り動かされずにはいられない。
剣の達人であるナルメアに稽古をつけてもらう時、
そのたゆんたゆんと揺れる大きな胸に、
申し訳ないとは思いつつも何度目を奪われてしまったことか。
それが、ハート型にぱっくりと開いたエプロンの胸元からのぞいている。

「来てくれてありがとう！さ、座って座って♪」

「あ、ありがとうございます。」

そう言って、椅子を勧めてくれるナルメア。
グランは勧められるままに腰掛ける。
ナルメアの姿に見惚れてしまって気づいていなかったが、
机の上には、ラズベリーピューレにホイップがたっぷり乗ったチョコケーキがあり、
ハート型のチョコや、ナルメアの形をした可愛らしいシュガークラフトが飾られている。

「団長ちゃん♪ねぇ団長ちゃん♪お姉さん、勉強してきたんだ！
どうやったらもっと美味しく、
チョコを団長ちゃんに食べてもらえるのかを、ね……！」

「は、はい。」

子どものように目を輝かせながら、ナルメア。
小さなチョコレートを手で摘み、こちらを笑顔でのぞきこんでくる。

「さ、まず普通にあ～ん♪」

「あ、あーん。」

『あーん』が普通に恥ずかしい、と思いつつも口を開く。
ナルメアはチョコを口の中へと運んでくれる。

「……どう？美味しい？」

「は、はい。」

「ふふ、じゃあ次だねっ♪
膝枕しながら、あ～んしてあげるね！」

「ひ、膝枕！？」

「その次は、よしよししながら、かな！
きっと今よりも、もっともっと、甘く美味しく感じるはずだよ♪
さ、おいで♪団長ちゃん♪」

言って、ナルメアはベッドの上で正座する。

「あ、あの…えっと……。」

流石に気恥ずかしい。
しかし、にこにこと眩しい笑顔を浮かべるナルメアには逆らえない。
それに、抗いようのない魅力があるのは事実だった。

「じゃ、じゃあ……。」

ナルメアのベッドの上に座り、その柔らかなふとももへと頭をのせる。
あたたかく、柔らかなナルメアのふとももの感触。
蕩けてしまいそうなくらいに、心地いい。

「ふふ♪あ～ん♪」

「あ、あ～ん……。」

また、小さなチョコをくれる。

「えへへ～♪上手に食べれたね～♪えらいえらい♪」

もぐもぐと、頬張る。ただそれだけの事をナルメアが褒めてくれる。

「ふふっ♪まだまだあるからね～♪」

「は、はい……。」

甘くとろける甘美な時間。
角砂糖百万個分にでも匹敵しようか、
というほどの甘いひとときをしばらく過ごした。

「じゃあ、ね。次は……。」

もじもじと、少しだけナルメアの頬が赤くなる。

「く、口移しで、たべさせてあげるね♪」

はにかみつつも、ナルメア。
こちらの頭を優しくふとももからベッドへと移動させてくれる。
そして、ナルメア自身も寝転がりつつ、
唇でチョコをはさみ、こちらへと口を近づける

「なっ、ナルメアさんっ……それ…はっ……んんっ！んっ……。」

甘いチョコの味が広がり、
柔らかな唇が惜しげもなく押し付けられる。

「美味しい？」

少し照れつつも、笑顔でナルメア。
あまりの甘さと、えっちな気分で声が出せないほど魅了されたグランは、
ただこくこく、と頷いてそれを返す。

「ふふ。よかった。まだまだあるからね。ん～っ♪」

「んんぅ……。」

何個チョコを用意しているのだろう。
こんな甘いキスを何度も何度も繰り返していては、正気ではいられない。
ナルメアは、軽い口づけでは物足りなくなったのか、
こちらの背中に腕を回し、きゅっ、と抱きしめてくれる。
豊満な胸が、グランの身体にぎゅぎゅっ、と押し付けられる。

（っぁっ……！！）

あまりの気持ちよさに、グランのおちんちんが甘く勃起してしまう。

「……♪」

それに気づいたナルメアが、服越しではあったが、
グランのおちんちんに手を這わせる。

（ぁっ……、ぁっ……）

優しく、やさしく、なで上げられていくおちんちん。
甘立ち状態のおちんちんは、緩やかに、固く大きく勃起させられていく。

（ぁ、ぁぁ……。）

「んっ……♪」

口づけを交わしたまま、
ナルメアが窮屈な衣服からグランのおちんちんを解放してくれる。
先走りのおつゆが少し溢れたおちんちんが、勢い良く顔を出す。

「ん、んんっ……！？」

「ん～っ♪」

ナルメアが亀頭を撫で回し、円を描くように手のひらを動かしながら、
亀頭から溢れたおつゆを塗り広げていく。
先ほどよりもやや強いその刺激に、おもわず声が漏れる。
やがて、チョコが完全にとろけ、ナルメアが口を離す。

「ねぇ、団長ちゃんーーー
……んーん、グランちゃん……。」

真っ赤に顔を上気させ、ナルメアが口を開く。

「お姉ちゃん、ね。とっても、わがままなんだけど、
グランちゃんにお願いがあるの。」

「……。」

「お、お返しが、ほしいな……って。」

「お…かえし……？」

快楽で頭が上手く働かないけれど、なんとかその言葉だけを返す。

「う、うん……。グランちゃん、ずっと見てたよね。ここ……。」

言いつつ、ナルメアがエプロンからはだけた胸を、指でつんつんとつつく。
柔らかでまっしろな、胸。

「っ……！す、すみません……。」

できるだけ目を離そうとしていたけれど、
上手く出来てはいなかったようだ。

「ち、ちがうの！ちがうの！おこってるわけじゃないの！
むしろ、その……とっても、うれしいなって……。」

最後は消え入りそうな声で、恥じらいながら、ナルメア。

「だ、だから……ぐ、グランちゃんのおっきいここを……」

「っ……！」

「た、たべちゃいたいな……なんて……。」

その言葉のえっちな響きに、くらっとめまいがする。

「……あ、あの……」

「な、なんて！ぐ、ぐ、ぐらんちゃんが、よければ、なんだけど！？」

てんぱりつつ、ナルメア。
そんな姿がなんだか微笑ましくて、とても愛おしい。

「お、お願い、します。おねえちゃん……。」

「！よ、よ～し。がんばっちゃうね、グランちゃん♪」

体験版はここまでとなります。
お気に召しましたら、ご購入していただけると幸いです。